

生産現場でのIPMの取り組みについて



三河温室園芸組合 神田成臣

農事組合法人 三河温室園芸組合の概要

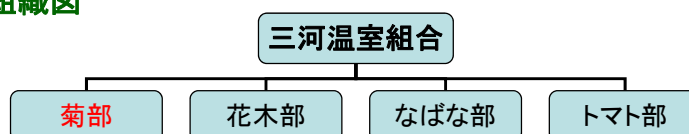
組合設立：昭和4年
組合員数：52名
販売金額：年間13億円

出荷品目

つま菊、花木類(もみじ、なんてん、
笹葉など)、なばな、クレソン、
マイクロトマト、食用ほおずき、
きゅうり花など30品目以上。



組織図



つま菊の紹介

つま菊とは

- ・ 刺身などに添えられている小さな食用菊。
- ・ 東三河地域で**全国の90%以上**が生産されている。



三河温室組合の生産規模

生産者数: 45名
栽培面積: 24ha (**ナゴヤドーム約18個分**)
生産量 : 年間290万パック



2

つま菊栽培の紹介

栽培期間: 定植から収穫まで90～100日間

収穫期間: おおむね15～20日間

年間を通して生産するためのポイント

- ・ 計画的に植え付けを行う。
- ・ 電照などにより開花調節を行う。
- ・ 栽培時期により品種を使い分ける。



電照の様子

課題となる害虫

ハダニ、ハスモンヨトウ、アブラムシ、ハモグリバエ、アザミウマ

3

つま菊の害虫防除

これまでは

害虫は春から秋にかけて多発するが、その対策が十分取れなかった。

主な原因

- ・ 害虫に薬剤抵抗性がついてきている。
- ・ 食用ぎくに登録のある農薬が少ない。

そのため

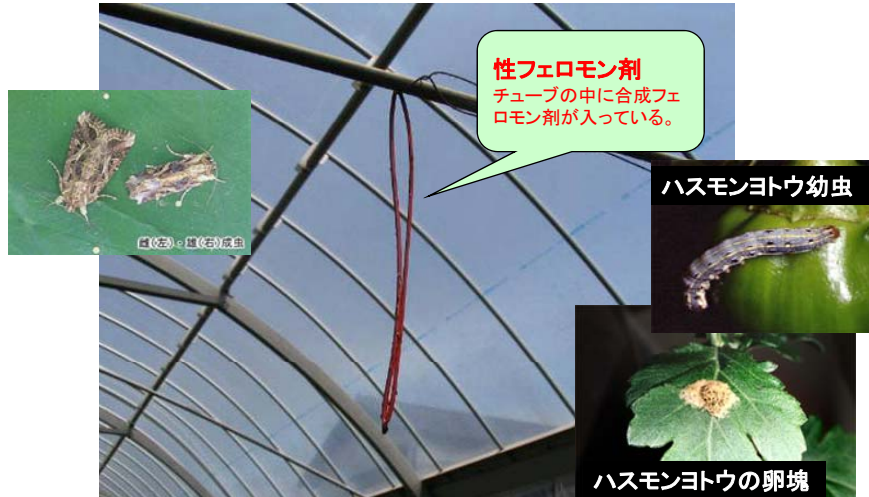


化学合成農薬だけに頼らず、いろいろな防除方法を組み合わせたIPMIに取り組んでいる。

防除事例1 防虫ネットの利用



防除事例2 性フェロモン剤の利用



ハウス内での交尾を防ぐことにより、ハスモンヨトウの被害を抑える。

6

防除事例3 粘着板の利用



- ・ 黄色粘着板でハモグリバエ、青色粘着板でアザミウマを捕殺。
- ・ 害虫の早期発見により発生初期に防除。

7

防除事例4 天敵の利用

ハダニの防除に
苦勞している

ハダニ防除が難しい理由

- ・繁殖力が強い
- ・世代交代が早い
- ・薬剤抵抗性がつきやすい
- ・効果の高い登録薬剤が極めて少ない。

そのため

2年前から県の協力で捕食性天敵のカブリダニ
(ハダニを食べるダニ)の導入試験を実施



ハダニ



カブリダニ

8

天敵の導入効果



カブリダニの
定着により

効果



- ・ハダニの増加を抑えることができた。
- ・化学合成農薬の削減ができた。
- ・防除作業が省力できた。

9

今後の取り組み

生産面では

化学合成農薬にできるだけ頼らず、色々な防除方法を組み合わせて品質の高いつま菊を安定供給。

販売面では(市場、消費者に向けて)

産地からの積極的な情報発信

例えば

- ・ 化学合成農薬の使用だけに頼らない栽培(IPM)に心がけている。
- ・ 消費拡大のため、つま菊の利用方法などを提案。



市場向けの月報